茨城県立水戸第一高等学校
硬式野球部後援会
三の丸倶楽部会報

入　魂

第 24 号

令和２年３月１日

発行人　事務局長　森　利克
316-0026
日立市みかの原町 2-15-8
TEL/FAX：　0294-53-1351
E-mail : ihm2158@ak.wakwak.com

Ⅰ　石井連藏氏の野球殿堂入りを讃えて

早大監督時代の石井氏

去る１月 14 日、公益財団法人野球殿堂博物館が「2020 年野球殿堂入り表彰者」を発表し、水戸一高硬式野球部 OB の故・石井連藏氏（昭和 26 年卒）が野球殿堂入り（特別表彰）を果たしました。伝説の早慶６連戦からちょうど 60 年の節目の機に、当時の慶應義塾大野球部監督、故・前田祐吉氏と同時の受賞となりました。母校硬式野球部 OB の野球殿堂入りは、昭和 35 年に受賞した故・飛田穂洲（本名：忠順）氏以来２人目、茨城県出身者としては６人目となります。今回の会報では、改めて石井連藏氏の功績を振り返るとともに、日本中の注目を集めた伝説の早慶６連戦についてもご紹介いたします。

＜石井連藏氏の功績＞

昭和 7 年 6 月 26 日、茨城県大子町出身。昭和 23 年水戸一高に入学、硬式野球部に入部し、1 年生であった同年夏から投手として活躍。昭和 24 年、主将を務めた 2 年生秋の県大会では決勝戦まで進んだが決勝戦で水戸商に 2－３で惜敗。昭和 25 年春は県大会を制し関東大会へ進出し、2 回戦では４－5 で明治高に惜敗するも 2 点本塁打を 2 本放つなど打者としても力を発揮。そして同年夏の選手権では茨城大会を制し宇都宮市での北関東大会へ進出。１，２回戦を快勝したが、甲子園出場権をかけた宇都宮工との決勝戦では０－３で敗れ、甲子園にはあと一歩及ばなかった。

その後、昭和 26 年に早稲田大学野球部に進み、東京六大学野球リーグでは在学中 3 度の優勝を経験。2 年生からエースとしてストレートと大きなカーブを武器に活躍、なかでも早慶戦では 6 勝を挙げ大活躍した。4 年次には主将を務めたほか、持ち前の勝負強い打撃から一塁手、四番打者も務め、昭和 29 年秋季リーグでは、投の柱として活躍しつつ、打者としても首位打者･打点の二冠を獲得し優勝に貢献した。投手としてリーグ通算 52 試合登板 21 勝 12 敗、防御率 1.78、132 奪三振。打者として通算 70 試合出場、223 打数 63 安打、1 本塁打、31 打点、打率 .283。

早稲田大学卒業後、社会人チームを経て、昭和 33 年に 25 歳の若さで早稲田大学野球部第 9 代監督に就任。水戸一高・早稲田大学の大先輩飛田穂洲氏ゆずりの精神野球を掲げ、投手中心に守りの堅い野球で就任 3 シーズンでチームを初優勝に導く。昭和 35 年秋には伝説となった早慶６連戦を指揮、チームを 3 季ぶりの優勝に導いた。この“６連戦”は慶應･前田祐吉監督との青年監督対決としても話題を呼んだ。その後、昭和 38 年まで 6 年間にわたって監督を務めた。

昭和 63 年、低迷にあえぐ早大野球部の第 14 代監督に再就任。3 年目の平成 2 年春、8 年 15 シーズンぶりのリーグ優勝を果たした。平成 5 年秋にもリーグ優勝を遂げ、翌年秋のシーズンを最後に監督を引退した。

2 度の監督時代を通じて、前期で安藤元博・徳武定之・近藤昭仁、後期には水口栄二・小宮山悟（現早稲田大学野球部監督）・仁志敏久・織田淳哉ら、卒業後プロで活躍した選手たちを送り出した。なお、早稲田大学野球部史上、監督を 2 度務めたのは石井連藏氏のみである。

故石井氏 野球殿堂入り
大子出身 早大、水城高で監督
水城高野球部監督時代の石井連藏氏＝1997年7月
石井連藏氏
野球殿堂博物館は14日、今年の殿堂入りのメンバーを発表し、東京六大学野球の早稲田大監督を2度務めるなど、アマチュア界の発展に寄与した大子町出身の故石井連藏氏＝2015年9月27日、83歳で死去＝が選ばれた。本県出身者の殿堂入りは06年の故豊田泰光氏以来5人目。
（7面に関連記事）
石井氏はアマチュア審判・監督が対象となる特別表彰者の殿堂入り。表彰者は11人（故豊田氏を含む殿堂入り表彰者は14人）。故石井氏は、故前田祐吉氏（78・慶大）を破り、初の75％を超えて決まった。石井氏は水戸一高から早稲田大に進み、4年時は主将を務めた。その後、社会人チームを経て早稲田大監督に就任。1960年秋のリーグ戦は優勝決定が最後の早慶戦に持ち込まれ、引き分けを挟みの6連戦となる激闘を指揮し、逆転優勝に導いた。88年には早稲田大監督に復帰し、常総学院高出身の仁志敏久氏を育成した。96年9月から在職期間、六大学でも監督を務めた。これまでに本県からは石井氏の高校でもある飛田穂洲（本名・忠順）のほか、故石井藤吉郎氏、故根本陸夫氏、故田宮謙次郎氏、故豊田泰光氏＝写真＝が殿堂入りしている。
今年の殿堂入りは、石井氏のほか、慶大監督として石井氏との師弟関係を築き、特別表彰・プロ野球阪神や西武で活躍した田淵幸一氏（73＝エキスパート表彰＝）が選ばれた。（小船田匡己）

「茨城新聞」より

その後も、平成８年から２年間水城高野球部監督を務めたほか、大子町にて「石井連藏杯争奪少年野球大会」を主催するなど学生野球の振興や育成に力を注いだ。平成 27 年 9 月 27 日、埼玉県さいたま市にて死去。享年 83 歳。

＜伝説の早慶６連戦＞

昭和 35 年秋季リーグ戦の優勝争いは、最終週の早慶戦を前に、早慶 2 校に絞られていた。両校を指揮するのは早稲田が 3 年目・28 歳の石井連藏氏、慶應は新監督で 30 歳の前田祐吉氏。勝ち点１の差

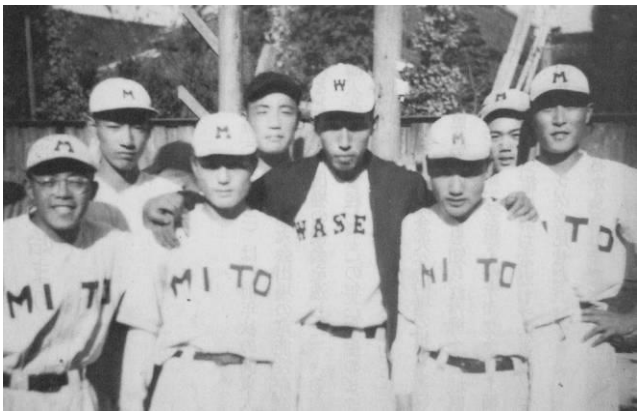
で追っていた早稲田は、11 月 6 日～8 日に行われた早慶戦を２勝１敗とし慶應から勝ち点を挙げた。これで早慶両校は勝ち点･勝率ともに並び優勝の行方は決定戦に持ち込まれた。

続けて 11 月 9 日に行われた優勝決定戦は投手戦となり、０－１で迎えた早稲田は土壇場の 9 回に同点に追いつき、11 回を終えたところで日没引き分けとなった（当時神宮球場には照明施設がなかった）。なお、決定戦再試合はリーグ戦史上初めてのことだった。

1 日おいて 11 月 11 日に優勝決定戦の再戦が行われたが、前の試合で完投した両投手がこの日も好投し０－０のまま前の試合に続いて延長戦へ。11 回裏、慶應は無死 1,3 塁のチャンスを作るも満塁策をとった早稲田の必死の守りの前にホームを踏めずまたも日没引き分け、再試合となった。

11 月 12 日、優勝決定戦の再々戦。この日も両エースが先発するが、2 回に先制した早稲田が試合の主導権を握り、慶應の追撃を 1 点に抑え、３－１で勝利した。この６連戦には連日満員（計 38 万人）の観客が詰めかけ、決定戦が引き分けに終わると次の試合のチケットを求める徹夜組の列が早速でき上がるほどであった。６連戦の模様は NHK だけでなく民放各局が連日放映、全国の注目を大いに集めた。なお、6 戦目では、慶應應援指導部が秘密兵器にと用意していたチアリーダーが応援台に立ち、会場を大いに盛り上げた。これが日本の野球応援にチアリーダーが登場した最初だといわれている。

（昭和 63 年卒　船橋信正　水府倶楽部・
三の丸倶楽部幹事）



母校を訪れた早大学生時の石井氏（昭和27年春）
創部120年部史「熱球120年水戸中学水戸一高野球部の軌跡」より

□□石井連藏先輩の野球殿堂入りにあたって□□

◇昭和 55 年卒　小室　吏

私が水戸一高野球部だった昭和 52 年～55 年、監督として指揮を執っていただいたのは大澤良昭氏。石井連藏氏と同期であり当時からよく水戸一高時代の話を聞いていた。

昭和 55 年 4 月、私は早稲田大学野球部へ入部を志し合宿所である安部寮を訪れると、当時の早大野球部監督だった宮崎康之氏が入部希望の新入生には全員面談をするという。応接室で入部希望届に球歴・出身校などを記入し、緊張しながら宮崎監督を待った。応接室に現れた宮崎監督は小柄な方ではあったが、眼光鋭く厳しい方だろうというのは容易に想像できた。宮崎監督は入部希望届に目を通すと、開口一番こう言った。「なんや、お前は石井連藏の後輩か。あいつはホンマにワシの言うことを聞かんヤツやったのう。」と破顔一笑された。宮崎康之氏が早大 4 年時の主将を務めていた際、1 年生で入ってきたのが石井連藏氏であったのだ。すぐに鋭い眼光に戻った宮崎監督は「いいか、早稲田の野球部は練習も厳しいところだぞ。お前、ついてこれるか？」「はい、頑張ります！」「よっしゃ、小室、お前は合格！」

そんなわけで早大野球部の門を叩いた初日から、石井連藏氏の存在の大きさに気づかされることになった。

私が早大野球部に在籍していた昭和 55 年～59 年、石井連藏氏は朝日新聞スポーツ局に勤務されていた。当時の早大野球部には数々の伝説が残されており、先輩方から色んな話を教わった。なかでも石井連藏氏が一回目の監督をされていた際の安部球場での厳しい練習の様はよく語り継がれていた。早大 2 年からマネージャーとなった私は石井連藏氏にお声がけいただき、幾度か「飯でも食いにいこう」と食事に誘って頂いた。確か石井氏の勤務先の近くで築地の料亭のようなところだったと記憶している。色んな話をして頂いたはずだし、当時の学生がそうそうありつけないような高級な料理を頂いたはずであるが、なにせ母校の大先輩であり大学でも数々の伝説が残っている方だ。とにかく緊張しまくっていたもので何をお話して何をご馳走になったのか、正直殆ど覚えていないのだ。

さて、先日野球殿堂博物館の部長と話しをする機会があった。もちろん石井連藏氏が今回野球殿堂入りで東京ドームにある野球殿堂博物館にもその名が刻まれることとなったのだが、2 度の東京六大学野球の監督歴だけではなく、日米大学野球の開催にご尽力されたことや日本学生野球協会理事などでアマチュア野球全般に多大なる功績を残されたことが今回の殿堂入りに繋がったのであろう、という話をされていた。

飛田先生が野球殿堂入りを果たしたのが昭和 35 年（1960 年）。それから 60 年の時を経て、母校２人目の野球殿堂入りとなったことを心よりお喜び申し上げます。

◇平成 18 年卒　鈴木　寛明

この度は石井先輩の野球殿堂入り、誠におめでとうございます。私が石井先輩に直にお会いしたのはほんのわずかな時間ではありましたが、僭越ながら

筆を執らせていただこうと思います。

私が早稲田大学野球部に入部した当時、石井先輩はほとんどの試合で神宮球場に駆けつけ、早稲田の試合を見守っておりました。また、ＯＢ総会など野球部関係の各種行事において、最初の挨拶をするのは必ず石井先輩でありました。私は入部当初から日々グランド整備等いわゆる『１年生の仕事』に追われ、何とか一日を過ごしている状況が続いていましたが、初めて石井先輩が挨拶するのを見たとき、「これは絶対に辞められん。高校の先輩でもある石井先輩の顔に、泥を塗ることはあってはならない…」と覚悟が決まり、４年間の大学野球生活を全うすることができました。

石井先輩には神宮球場などにて数度ご挨拶させていただくことしかできませんでした（キャラメルをくださるなど、想像以上に気さくな方でした）が、石井先輩の教え子である故･荒川悌二先輩（水戸一高昭和 33 年卒）には大変お世話になりました。荒川先輩は「早慶６連戦」時の早稲田の控え捕手で、私の在学時に度々グランドにいらして激励してくださった上、何度も食事にまで連れていってくださいました。そしていつも、「今は全力で頑張れ。ただ、社会に出てからが本当の勝負だ。」と背中を押してもらいました。荒川先輩のほかにも石井先輩が指導された方々には度々お会いしますが、誰もが熱く真摯に人生に向き合っているように感じます。石井先輩がどのように選手に指導されていたのか、私は見ることはできませんでしたが、こうした方々にお会いするたびに、その一端に触れているような気がしています。

野球界への貢献はもちろんですが、今後の野球界を担う人材も、石井先輩は多数育ててこられました。石井先輩の野球に対する姿勢をしっかりと継承し、水戸一高野球部が「高校野球界のリーディングチーム」として発展していくことを、心から願っております。

Ⅱ　寄稿　「母校野球部４度目の甲子園出場を目指して」　井内　義興

西日本水中一高会・会長（昭和 33 年卒）

皆さん、初めまして。私は昭和３３年卒井内義興です。５年程前に、昭和３８年卒川上邦利君の紹介で三の丸倶楽部に入会しました。今回、森事務局長から原稿依頼を受け、何を書こうか考えましたが、思いつくままに書いてみようと思います。

私の学生時代は野球が盛んで、特に高校野球は人気の的でした。当時本校では、平出君・生田目君の左右の完投能力のある好投手を擁して守りの全員野球であったと思います。

昭和３２年には神宮球場で開かれた第１１回学生野球大会で優勝しております。

昭和３０年・３１年の夏の県予選で優勝しましたが、北関東大会で桐生高校や足利高校に１点差で敗れ、あと一歩のところで甲子園出場は出来ませんでした。その後、６０余年甲子園への道は遠のいております。

さて、高校野球はその理念に「教育の一環」を挙げております。君達はその理念をしっかりと理解して文武両道を実践して、ただ一筋に甲子園を目指して戦っております。

君達は青春時代にしか出来ない貴重な体験を積んでいると思います。この貴重な体験を心の奥にしっかりと留めておいて下さい。大切な決断をする時に思い出して下さい。必ず勇気・闘志をあなた方に与えてくれると信じております。

しかしながら、高校三年間文武両道を目指して走り続ける事は、時間的にも、体力的にも、精神的にも相当厳しく、ちょっと気を許すと挫折してしまうと思います。しかし、三の丸倶楽部会報「入魂」の第２３号で木村優介顧問の「甲子園への想い」と君たち一人ひとりの野球に対する「決意の言葉」を読ませていただき安心すると同時に羨ましく感じました。君達の野球に対する純粋な情熱がしっかりと感じられ頼もしく誇りに思いました。

私は今まで水戸一高の甲子園出場は「夢」であると思いながら応援し続けてきましたが、これからは「夢」ではなく「目標」としてこれまで以上に応援して行きたいと考えております。

君達と戦う相手はどんなに強豪チームでも同じ高校生です。文武両道で培った強靭なファイトと水戸一高野球部の深き伝統と歴史に誇りを持って戦うことを期待しております。必ず「甲子園への道」は開けます。

私の人生訓の言葉を結びと致します。

「　真の友情は、
　　人生の喜びであり、人を育む。」

（追記）私は「西日本水中一高会」のメンバーです。会は多彩な人材の集まりで野球部のＯＢも会の運営に協力しております。詳しい事はホームページ（mito1kizuna.wixsite.com）をご覧下さい。

会の概要

・会員数　約120名
・主な行事　総会（12月）、若手講演会（6月）、歓送迎会など
・年会費　2,000円
・会報　「きずな」（年2回発行）
・おもな役員（2019年度）
　会　長：井内 義興（昭33卒）
　副会長：伊原 郁夫（昭41卒）
　副会長：廣瀬 峰太郎（昭42卒）
　副会長：中崎 好文（昭45卒）
　副会長：藤原 浩（昭52卒）
　副会長：笹沼 一弘（昭58卒）
　幹事長：佐々木 貴昭（平14卒）

西日本水中一高会

西日本水中一高会は、関西を中心に活動している、茨城県立水戸中学・茨城県立水戸第一高等学校の同窓会。
「水戸から遠く離れた地」に来たOB・OGが、世代を超えて交流している楽しい組織です。
縁あって西日本に進学・就職・転勤してきたみなさん、仲間になりましょう！

お知らせ

2019年度総会開催されました。
12月7日（土）、恒例の総会が、大阪第一ホテルにて39名の参加をいただき開催され、盛会のうちに終了しました。ご参加・ご協力いただきました皆さん、ありがとうございました。（写真は、2018年度の総会の様子です。）

Ⅲ　令和元年度後半　活動報告　　事務局長　森　利克

前会報第２３号発行（令和元年９月１日）以降の活動状況について報告します。

（１）会報第２４号をお届けしました。今回の巻頭記事では、本年１月１４日（火）にアマチュアや審判員が対象となる特別表彰を受けて野球殿堂博物館入りを果たした、昭和２６年卒で元早稲田大学監督（第９代、第１４代）の故石井連藏氏の偉業について紹介しました。東京６大学野球で監督として活躍し、日米大学野球の開催に尽力するなど、アマチュア野球界に多大な貢献をしたことが評価されました。明治４０年卒で早稲田大学の初代監督、朝日新聞記者として活躍して同様に殿堂入りした飛田穂洲(忠順)氏に続く快挙です。後輩部員たちが偉大な先輩に続く活躍をすることを期待したい。なお、記事は水府倶楽部の会員でもある船橋幹事に作成いただきました。

　また、西日本水中一高会の会長である昭和３３年卒の井内様に野球部への激励文をお寄せいただきました。関西地区在住の水府倶楽部会員の学生もいろいろとご指導いただいています。

（２）会員拡充策の一環として、７月末に引退した３年生部員の父母会およびその関係者の皆様へ、１１月１６日(土)の知道会総会参加者へ、それぞれ入会案内を配布して広報に務めた結果、１１名の皆様に入会いただきました。現在の会員数は約１９０名、元会員（退会、２年以上会費未納）は約１４０名です。

（３）野球部支援として、幹事会で承認された以下２件について会費から支出しました。

①練習球場２０ダース（約１６万円）
②コーチ２名謝礼（半年分６万円）

（４）公式および準公式戦では、昨年８月のジュニア大会で久しぶりに水商と水戸啓明に競り勝ってブロック優勝（地区決勝進出相当）できました。秋季地区大会でも茨城高に勝って１２年ぶりに県大会に出場しました。２回戦で土浦日大に敗れたものの、今後に期待できる内容でした。応援帽子を着用して応援いただいた会員の皆様ありがとうございました。

（５）昨年春夏連続して甲子園出場を果たした鳥取県の名門米子東紙本監督の部運営方針は、文武両立を目指す公立校に大きなヒントを与えています。その内容が最近 YAHOO ニュースの記事として紹介されましたので、その要点を紹介します（次ページに掲載）。

監督は部の経営者であり、部員の保護者も支援者ではなく戦力として捉えています。ホームランボールは感謝の言葉を添えて母親に渡しているそうです。関係者全体のチームワークを醸成するヒントが示されています。

　なお、本ニュース記事は昭和３９年卒酒井会員からの紹介により作成しました。

（６）令和２年度の総会を６月７日（日）１１：００から知道会館で開催する予定です。１年間の活動報告と提案・審議事項を含めたその資料は事前（５月上旬）にお届けいたします。

ヤクルト球団専務江幡先輩（昭和47年卒）から
令和元年納会時に講話をいただきました

森下トレーナーによる基礎鍛錬

公立が強豪私学に勝つ方法…米子東・紙本庸由監督の仕組みづくり

ＹＡＨＯＯ！ニュースで去る２月８日（土）に配信された中島大輔氏の記事の要点を紹介する。

（1）高校野球は優秀な選手を全国から集める強豪私学の時代になりつつあり二極化が進行。
（2）今年の選抜大会出場３２校のうち、公立校は７校
（3）公立校が伍して戦うにはチーム力を突出させる“何か”が不可欠。
（4）そのヒントは昨年春（２３年ぶり）夏（２８年ぶり）連続で甲子園出場を果たした紙本監督３８歳のユニークな取り組みから見えてくる。
（5）監督は部を経営しているから経営者と一緒。ヒト、モノ、カネ、情報の４大経営資源が集まる仕組み作りに注力。
（6）米子東のカネはＯＢ会費や後援会費。ＯＢ会や後援会の方々に興味・関心を持っていただき、強化に参画してほしい。若い人を巻き込んでカネを集める仕組みを作り、どんどん助けてほしい。
（7）保護者は支援者ではなく戦力である。
（8）母親たちは君たちの体を考えてご飯や弁当を作っている。プロテイン買ってと頼んだらショック！
（9）栄養士を招き、母親と部員、コーチとともに調理実習。上級生の母親が先生役で「食べ残さなくさせる工夫」、「嫌いなものを食べさせる工夫」など、新入生保護者に教える中で母親間のネットワークが拡大。
（10）ホームランボールは母親に「打たせてくれてありがとう」とプレゼントさせている。
（11）保護者も共に戦う仲間。その意識が相互にあると地元の中学生に「野球をやるなら米東だよ」と優秀な営業マンになる。
（12）いろいろな人が自然に集まるチームにしたい。みんなで成長し、いい思いをし、それが地域に還るようにしたい。

※本ニュース記事は昭和３９年卒酒井会員からの紹介により作成しました。
米子東高等学校　明治３２年（１８９９）創立

Ⅳ　シリーズ「大学野球を目指す後輩部員たちへ」

「野球で学んだこと」

平成 28 年卒　高橋　侑也

平成２８年卒の高橋侑也です。私は現在名古屋大学工学部３年で硬式野球部に所属しています。名古屋大学硬式野球部は全国の連盟の中でも加盟校数が多い３部２７大学からなる愛知大学野球連盟に所属しており、２部リーグからでもプロ野球選手が輩出されるなど非常にハイレベルなリーグとなっています。昨秋私たちは２部Ｂリーグに昇格し、さらに弊部の松田が中日の育成指名を受けました。この良い流れを生かし、勝利を積み重ね更に上に行けるよう日々練習に取り組んでいます。

このように私は名古屋大学で野球を続けているのですが、正直な話高校野球を終えた後この先野球をするつもりは全くありませんでした。高校で練習に真面目に取り組んだのにもかかわらず一向に上達せず、その上怪我にも悩まされ、これだけやったのに上達しないなら不向きなのだろうと考えていました。

しかし、浪人という期間を経て自分の野球人生を省みたときにもっとこうするべきだったのではないか、このままでは終われない、という気持ちがあり大学で再び野球をすることを決意しました。そして入部した先で練習を一生懸命取り組む人や、それを経て大きく成長した人に会い刺激を受けました。野球を取り組む姿勢や練習や練習外での意識を身近に学び、自分もまた野球と向き合い続けたことで高校３年間上手くならなかった自分も少しですが上達することができました。

大学で野球を続けたこと、そこで出会った人を抜きに不向きという自分の価値観が大きく変わることはなかったと考えています。

高校野球を終えた後で、選べる道は幾つも存在します。私はその一つとして大学野球という異なる環境で野球と向き合う道を選び、新たな答えを得ることができました。私だけでなく後輩たちも大学野球で得られるものがあるのではないでしょうか。拙い文章ですが、これを読んでいただいて大学野球の魅了を少しでも感じていただけたら幸いです。

最後になりますが、日頃から三の丸倶楽部の皆様にはご支援を賜り誠にありがとうございます。これからも何卒ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

Ⅴ　新企画「新・異・先端分野で活躍する先輩たち」

「卒業から 10 年、研究を通じて今思うこと」

平成 22 年卒　宮本　尚也

２０１０年卒の宮本尚也と申します。水戸一高を卒業し、３月でちょうど１０年になりますが、野球部で学んだことは、私の考え方の礎となっています。特に、当時の監督であった中山顕先生には、野球の技術に加えて「受け取る側の能力」の重要性を教えていただき、今でもよく思い出します。最後の夏は初戦敗退、数え切れない後悔がありますが、今思い返せば、仲間たちと同じ目標に向かって努力したあの経験は、かけがえのないものだったと感じています。

私はその後、一年間の浪人生活の間に、好きな化学で人に役立つ仕事がしたいと考え、東北大学薬学部に進学しました。大学では、学部３年時に研究室に配属されて以来、一貫して天然物の全合成研究（薬のもとになるような天然由来の化合物を、人工的に化学合成するという研究）に取り組んでいます。

その中で、野球部での経験が活きた場面が何度もありました。一つは、実験がうまくいかなかったとしても、そこからどれだけ情報を得られるかという粘り強さです。また、研究分野や国籍を問わずに、積極的に情報交換ができる度胸とコミュニケーション能力も役立ちました。さらに、毎日朝９時から夜は日付が変わる頃までの研究を、毎日継続するための体力面でも、大きく役立っています。

今後は、３月に博士号の学位を取得後、製薬企業の研究者として、実際に医薬品の候補化合物の化学合成に携わる予定です。企業研究者になる以上、自分が関わった医薬品を患者さんのもとに届けることができるよう、謙虚な姿勢を忘れずに研鑽を積みたいと考えています。

最後になりますが、現役の部員の皆さんは、周囲の方々への感謝の気持ちを忘れずに、目の前の目標や課題に集中して取り組んで欲しいと思います。その過程で苦しんだり、失敗した経験は、必ず今後の糧になるはずです。一ＯＢとして、陰ながら応援しています。

Ⅵ　硬式野球部　名簿

（敬称略）

部長　小島 淳　監督　竹内 達郎　　顧問　太田 泰助　木村 優介

主将

折橋　秀哉
佐野中
内野手

青山　拓矢
多賀中
内野手

川勾　恒太郎
茨城大附属中
外野手

見坂　恒輝
八郷中
外野手

古谷　崇晃
下館中
捕手

副主将

佐次　泰晟
下館中
投手･外野手

田中　広海
水戸一中
内野手

豊田　楓斗
坂本中
内野手

宮野　礼門
茨城大附属中
内野手

<<二年生>>

<<一年生>>

石井　陽向
日高中
投手

栗林　修敬
佐野中
外野手

堺堀　史也
鹿野中
捕手

佐藤　航介
田彦中
外野手

田中　友暉
茨城大附属中
外野手

野々下　光
那珂湊中
内野手

檜山　駿太
結城中
投手･外野手

岡部　知世
茨城大附属中
マネージャー

Ⅶ　試 合 結 果 ・ 予 定

令和元年度後半　公式戦･準公式戦･定期戦結果

月	日（曜）	大　会	球　場	結　果
8	16日(金)	ｼﾞｭﾆｱ大会1回戦	友部高	○2－0緑岡
	17日(土)	〃　2回戦	〃	○9－0友部(7回ｺｰﾙﾄﾞ)
	20日(火)	〃　3回戦	〃	○3－2水戸商
	22日(木)	〃　ﾌﾞﾛｯｸ決勝戦	笠間市民	○1－0水戸啓明
	30日(金)	秋季地区代表決定戦	ﾉｰﾌﾞﾙｽﾀｼﾞｱﾑ水戸	○5－2茨城
9	14日(日)	〃 県大会2回戦	Jｺﾑｽﾀｼﾞｱﾑ土浦	●0－6土浦日大
10	27日(日)	一年生大会1回戦	水戸農	●3－4水戸葵陵
11	23日(祝)	水商定期戦	水戸一	△1－1水戸商
1	2日(木)	交流戦	水戸一	○3－2水府倶楽部(6回終了)

令和元年度後半　練習試合結果

月	日（曜）	球　場	結　果
9	8日(日)	水城高	● 5－7水城
			○13－4牛久栄進
	23日(祝)	佐竹高	○11－4佐竹
10	6日(日)	伊奈高	○ 9－1伊奈(降雨2回中止)
11	3日(祝)	前橋工	○10－3太田(群馬県立)
			○11－1前橋工(7回終了)
	4日(祝)	伊勢崎工	○ 4－3伊勢崎工
			○10－9　〃
	10日(日)	中央高	○ 7－3中央
			○13－9　〃

令和2年前半　試合予定（令和2年2月25日現在）

月	日（曜）	大会・試合・会場等（V:相手高G, H:水戸一高G)
3	8日(日)	練習試合　伊東商･常磐大(V)
	14日(土)	練習試合　牛久栄進(V)
	25日(水)	練習試合　鵜川(H)
	28日(土)	練習試合　安積(H)
	29日(日)	練習試合　佐久長聖･柏木農(H)
	31日(火)	練習試合　水海道一(V)
4	2日(木)	練習試合　清真(V)
	4日(土)	練習試合　つくば東風･岩瀬日大(V)
	9日(木)	春季地区大会組合せ抽選会
	11日(土)	春季地区大会　～4/14(火)
	18日(土)	練習試合　勝田(V)
	19日(日)	練習試合　鉾田二(V)
	24日(金)	春季県大会　～5/6(祝)
5	4日(祝)	春季県大会(練習試合　土浦一(未定))
	5日(祝)	〃　(練習試合　宇都宮(V))
	6日(祝)	春季県大会
	10日(日)	練習試合　緑岡(H)
	16日(土)	関東地区大会　～5/19(火)、23(土)～24(日)山梨県
	23日(土)	(練習試合　那珂湊(V))
	24日(日)	(練習試合　つくば国際(V))
	30日(土)	水無月杯(旧市内大会)　～6/4(木)
6	7日(日)	練習試合　佐原(H)
	14日(日)	練習試合　茨城東(V)
	23日(火)	茨城大会組合せ抽選会
7	7日(火)	茨城大会　～7月26日(日)

三の丸倶楽部

顧問：稲葉節生(S38 年卒元茨城県教育長)
会長：鬼澤邦夫(S38 年卒常陽銀行特別顧問、知道会会長)
事務局長：森利克(S38 年卒)
幹事：
照沼貞夫(S47 年卒、H20 年卒父母会)
池永充宏(H23、24 年卒父母会)
船橋信正(S63 年卒、水府倶楽部)
飯田芳久(H 元年卒)
馬場威彦(H30 年卒父母会長)

////// 会員を募集しています//////////

◇水府倶楽部（野球部ＯＢ会）及び現野球部父母会の会員以外どなたでも入会できます。
◇特典：会員帽子（入会時）の配付
　　会報（年２回）の送付
　　ホームページ「試合予定」、「試合結果」詳細の閲覧など
◇年会費：一口　３,０００円（何口でも可）
◇振込先：常陽銀行本店営業部
　　普通　２９４５６１９
　　サンノマルクラブ
◇手続き：氏名、住所、TEL 番号、メールアドレスを下記までご連絡ください。

森利克
Tel/Fax: 0294-53-1351
E-mail : ihm2158@ak.wakwak.com

編集後記　水戸市桜川の桜が蕾を持ち始め、球春を迎える季節となったが、新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない。その影響はスポーツイベントにも及び、プロ野球、サッカー、ラグビー、バスケ、女子プロゴルフ等が、延期･中止･無観客開催対応となった。2月26日に総理が「今後2週間は多数が集まる全国的なイベントは延期･中止･規模縮小等の対応をするように」と要請したことで、多くの団体から対応策の発表が相次いでいる。さらに、27日には、小中高に臨時休校が要請され、部活も自粛の方向だ。センバツが間近に迫っている。今のところは予定どおり開催のようだが、近く運営委員会を開き方針を決めるとしている。高校野球ファンとしてはいつも通りの甲子園を観たいところだが、こればかりはどうしようもない。今は、新型コロナウイルスの一日も早い収束を願うのみだ。（照沼）